

後日章

「特別寄稿」

あの壕は、今

元・国際協力事業団専門家

元・石川島播磨重工業株式会社勤務

嬉 昌夫 ソロモン諸島国一九九五年まで在住

一、ガダルカナル戦以前のツラギ地区

日本軍がツラギ地区に上陸した一九四二年五月以前のツラギ地区はツラギ島、ガブツ島、タナンボコ島、マカンボ島の四島が一体となつた形で貿易港を形成していた。

当時、ツラギ島長さ約三キロ幅約〇・八キロがイギリス総督府の所在地で、ソロモン群島の政治経済の中心地であつた。小高い緑に囲まれた丘の上には、赤色屋根の白亜の政庁舎や政府高官の家屋と、島民家屋が建ち並び、非常に美しい眺めだつた。島の北東にある港（現在の国営造船所第二工場）には三〇〇〇トンの船の接岸が可能な棧橋、事務所、倉庫などが建ち並んでいた。南東地区にはクリケット場、小ゴルフ場、テニスコート、病院、住民の居住区、刑務所などがあり、島の北側には中国人居住区もあつた。また、ガブツ島、タナンボコ島、マカンボ島（各々長さ一三〇〇メートル幅一〇〇メートルぐらいの小島）には、貿易会社の事務所、倉庫、住宅等があつて小さな町を形成していた。

一九三二年当時の人口はソロモン群島全体で約九万四七〇〇人。うちツラギ島は隣接するフロリダ島を含めて約五五〇〇人、ガダルカナル島は約二万四四〇〇人。ガダルカナル島の原住民は、支庁舎のあつたアオラ地区に多く住んでおり、戦闘の中心となつたルンガ地区から約五〇キロ東に離れていた。またツラギ島には欧州人が約一〇〇人、中国人が約一八〇人と記録に残されている。

ツラギ港は天然の良港で水深も五〇メートルと深く、周りを島に囲まれて波静かな内海を形成しており、ツラギ島とガブツ島には三〇〇〇トンの船が出入りしていた。当時の主産物はココナツ椰子で、年間約一万吨産出されたとの記録もある。

二、ツラギ地区、米軍上陸時の戦闘経過

一九四二年八月、呉の海軍陸戦隊約四〇〇人及び設営隊約七〇人の日本軍がツラギ島に上陸し、ガブツ島、タナンボコ島には、横浜海軍航空部隊約四〇〇人と呉の海軍陸戦隊

の一部約五〇人が上陸防備していた。ここは日本軍の最南端基地であった。八月七、八日の二日間の戦いで日本軍は玉砕したが、当時の戦闘の日本側の記録は、現在防衛研究所図書館にわずかに残るのみである。そこで、米軍の記録と現地調査をもとにして戦闘の概要を推測すると次のようになる。

八月七日午前八時、米軍はツラギ島の南西地区に上陸を開始した。同時にツラギ島の南側の上陸予定海岸丘(米側呼称二〇四高地)付近に約一七〇〇発の艦砲射撃を行った。当時の日本軍陣地は、島の東側のクリケット場の後ろの丘二八一高地が中心で、米軍上陸地点は無防備の状態であつたらしい。上陸した米軍は三手に分かれ、一隊は島の南側海岸ぞいに東を直指し、一隊は島を横断して島の北側ヤサアペ地区に出て北側海岸ぞいに東を直指した。残りは島の中央部分の山の稜線ぞいに東に向かつた、と資料には残っているが、現地を見るかぎり中央部の山は切り立った石灰岩の険しい山並みなので、結局島の南側と北側から東を直指し、中央部の山に入り、攻撃した。

七日昼間の日本軍の反撃は散発的で、本格的な反撃はその夜から行われた。米軍の中央隊に対し夜襲を敢行し、果敢な攻撃は一時米軍を押し返す、司令部付近まで迫っている。米軍はその夜ゴルフ場付近に展開し、狐孔、タツボのことを掘り、一夜を過している。だが、八日の日の出と共に主に南側海岸ぞいと北側海岸ぞいから日本軍を圧迫し、最後は二八一高地の洞窟に立て籠もっている日本軍と激戦を行っている。八日夕方にはほぼ激戦は終わったが、日本軍の激しい反撃で米軍の戦死者は一〇〇名以上にも達したといわれる。日本軍は全員玉砕であつた。(米軍側資料によると日本軍の捕虜一〇名との記述もある)

つづく

次回は八月二十四日(火)の予定